

判断 下記業務が“急務”

◆「古文書の救助」が基礎:

「**古文書の存在の意味**」、**大切さ**（各地域に継続されている過去からの地域情報）を地方の有識者が再確認し、その地域に未だ存在する古文書、過去それを救済する事、その内容を吟味するところからこそ、本当の「**地域お興しの基礎**」となる。国家主導による各地方における「**地域お興しの基礎**」作り。が急がれる。

◆古文書の救済（最適な仕事）:

各地域において廃棄されて続けている古文書を再生させる仕事。今まで存在している多くの古文書が、民家の蔵・地域資料館・公民館・図書館・元小学校等の片隅で死蔵、記録**内容を調査される事も無く「ゴミ」として廃棄**され続けている事も確認される。まずは古文書の所在情報を収集して補修とデジカメ撮影を実行、が急がれる。

◆10年後では不可能:

「古文書」の調査・補修 が出来る人材、それを **養成できる環境も激減** してゆくため優先すべき業務。

◆仕事の場合が必要:

急増する高齢者、女性・身障者において「働ける能力がある」にも関わらず、かつてのような製造サービス業による様々な「手に職」の職の育成が多くされなかったことにより、「職の仕事」の受注が激減。

◆“職”の仕事の適正検査:

各個人全員に各仕事の作業能力の立候補と適正検査を行う。プロによる指導と平行して適性能力の見分け判断が必要。

◆仕事を出す側・仕事を受ける側: どういう仕組み・工夫をすれば世界を相手に職人作業の受注ができる。

双方が合致する方法 を考えて火急実行する。

◆高齢者や主婦・身障者でもできる**仕事の発注が急務**:

日本国民の長所である細かな手作業を活かせる仕事。勤勉で細かい手作業が得意な国民性を発揮してくれる人材の養成を急ぐ。プロによる指導により、アマチュアをセミプロ、セミプロをプロとして教育する仕組みの作成と実行を急ぐ。

◆技能を教える側:

ゆくゆくは今回プロによりしっかりと指導をうけた「高齢者・主婦・身障者」たちが、セミプロの技術者・熟練者となり、多くの自分達の分身を、教える側・成長させる側の立場となる事ができ、段階的に指導できる基礎体制を火急つくる。

◆社交場・コミュニティの場合が必要:

「病院の待合室にゆけば誰かと会える」。「冬暖かく夏涼しい」かつ広々として居心地の良く健康管理も可能。多くのお年寄りが「病院の待合室」に行くことは誰も止められない。病院側もそれを阻止せずに歓迎する現象がある。

★待合室よりも全く自由で楽しい「**新しいコミュニケーションの場 兼 仕事場**」が、急ぎ必要。

今後、国民医療費負担は40兆円を超えてゆくため、新しい社交場(コミュニケーションの場)の提供が、何よりも急がれる。この傾向を読み、火急対策を実行。この現状をこのまま**見逃して拡大してゆけば「国の崩壊」**につながる。

病院の待合室より、楽しく、居心地の良い 社交場(コミュニケーションの場) 兼「仕事場の提供」が急ぐ。

県単位での場所の提供、新しい場の提供により、**何兆円の「負担減」に繋がるか** の「**実証実験**」も急ぐ。